

メープルレター(98)

ドリトル先生傘寿（80歳）の祝

暑かった夏の空の入道雲が姿を消し、鱗雲が広がるようになり、秋めいてきました。一年の三分の二が終ってしまいました。何と早く時の経つことか。半年を闘病に過ごしたせいか、その後の2か月間は、美しく感じるほど心が休まる時の流れでした。

ドリトル先生は8月11日に80歳になりました。不調を訴えることが多かった割には大病もせず、無事に80歳を迎えるました。ケベックに住む義理の次男の家を訪問するかたわら、1日早めの10日に80歳のお祝いをすることになりました。長男家族や娘家族も加わることになりました。料理上手で気配りのきく次男は、二日間に渡るお祝いの行事を快く引き受けってくれました。

旅にも出ず、遠出もしなかったドリトル先生には久々の長距離運転となりました。GPSを頼りにケベックまでのドライブは何とか速やかに。が、次男の家の手前で、ぐるぐる同じ道を行ったり来たり、

「お願い、迎えに来て。ここから動けない。迷ってしまったみたい。」

マダム田中が携帯をとり、次男に助けを求める羽目になりました。

「えー！それ、すぐそばにいるんだと思うよ。ともかく、待ってて。動かないで。今行くから。」

待つこと15分やって来た次男の車の後ろについて、どうにか次男宅につきました。

優しい次男は気をきかせてランチを用意して待っていたようでした。

「お腹空いているでしょう。簡単にランチしよう。」

あの大きなプールの前のテラスで、サラダとチーズの簡単なランチ。我が家にひと月半居たレンタル猫のモモも足元によってきて、和やかなほっとするランチでした。

「パパ、車はここに置いておいて。僕の車で今、ホテルまで連れて行くから。ホテルで少し休んでいて。夕方また迎えに行くから。」

次男が予約しておいてくれた快適なホテルでドリトル先生は一休み。日が落ちる頃、

「パパ、僕が今度は迎えに行くから。」

料理中の次男に代わって義理の長男が迎えに来ることになりました。ところが、待てど暮らせど、玄関口に長男の姿はなく、

「もうそろそろ玄関に降りてこない？」

と長男から電話がはいりました。

「玄関にずっといるけど。」

「えー！ 僕も玄関よ。」

「だって貴方の姿見えないけど。玄関の前？」

「あれー？ ちょっと待って、僕、も、も、もしかしたら、他のホテルの前かも。同じ名前のホテルがもう一つあるんだ。ちょっと確認するから。」

やっぱり、この人はいつもドジ。しかも、このど田舎のケベックの郊外に何故だか同じ名前の大好きなホテルが二つあったのです。20分ほどすると、長男のアудイの高級エレクトリックスポーツカーが玄関口にとまりました。キースジャレットのジャズピアノの曲が流れる黒の高級車。演出をすればするほどドジる長男。快適な乗り心地の車で、無事に次男の家に着きました。トマトのみじん切りとハーブをオリーブオイルで合わせた色鮮やかなソースをかけた酒蒸しのムール貝、生ガキ、サラミの取り合せなどなど、様々なオードブルで長男がもってきた美味しいワインを飲みながら、娘一家の到着を待つことにしました。娘はこの日は講演会があり、ついたのは夕闇迫る8時頃でした。

あのハリウッドスタイルの大きなプールのそばにディナーテーブルが用意してありました。流れ込む水もプールの水も鮮やかなブルーライトのイルミネーションで幻想的に演

出してありました。研究に疲れた夜はここでひと泳ぎしているのかもしれません。テーブルの脇には、野外暖炉に薪が燃えています。何と素敵な演出。次男は、金持ちというのではなく、そこそこの経済力でもライフスタイルを持つ子です。長男と娘のそれぞれの4歳の二人の子供達は、嬌声をあげ、ブルーに染まるプールサイドを何十回となく駆けまわり、追いかけっこをしています。この二人の叫び声すら見事な演出の一部のようです。

メインは鮭1匹と付け合わせの野菜をバーベキューで焼いたものでした。鮭は香り高いハーブのソースにマリネしてありました。一流のシェフも顔負けかもしれません。ソースも残すことなく、食べつくすほどです。次男の長男が豚の角煮のようなものを混ぜ合わせたスパゲッティをもってきました。16歳の孫もなかなか料理上手なのです。3種類のワインを味わうグラスもを進み、ほろ酔い加減です。チーズとサラダが続き、最後はバースデーケーキです。二つのバースデーケーキには目いっぱい蝋燭がたてられました。ドリトル先生が蝋燭を吹き消す間もなく、二人の孫娘がそれぞれ吹き消してしまいました。ケーキを食べるとまたプールサイドを駆け回る孫娘たち。こうして、夜は更け、シンデレラも真っ青になる真夜中にホテルにドリトル先生とマダム田中は届けられ、お祝いのディナーは終りました。

翌日は、間違いなく長男が迎えにきてくれ、次男宅で朝食と昼食です。朝食は、地元産の山盛りのイチゴとバターとジャムをたっぷりぬった分厚いパンのトーストに濃い目のコーヒーでした。総勢12人の並ぶテーブルは壮観です。きらめく早朝の夏の陽もプールサイドでは柔らかく、家を囲む緑も草花も控えめです。何もかも、ゆったりと、明るい光の中で流れていきます。そー、これはまるでルノワールの絵のような光景です。

朝食が終わると、皆、プールで昼食までひと泳ぎです。ドリトル先生もマダム田中も穏やかな、楽しい家族の風景を微笑みながら眺めております。

次男の娘が

「ねえ一和子ばあちゃん、くだらない馬鹿な死に方コンクールっていうのがあるんだけど知ってる？」

「何それ、聞いたことないわよ。」

「信じられない死に方をした実話なんだけど。話その1. 憎いライバルへの嫌がらせに爆弾の入った小包みを送ったらね、切手不足で自分に戻ってきてしまったんだけど、そんな事忘れて、これなんだろうって思わず開けてしまって、バーン。死んでしまった人がいるんだって。話その2. 冬の凍りついた湖に犬と一緒に行った人が、氷を爆弾で割ろうと思って爆弾をなげたら、そばの犬が、棒で遊んでくれてると思って走って取りに行ってご主人様の所にくわえてもってきて、ご主人様もろともバーン。死んでしまったんだって。話その3は、来週モントリオールに行くからその時するね。。」

テーブルの片隅で和子ばあちゃんと孫娘のホラー話がひそひそと続いておりました。

やがて、昼食。バーベキューで焼いたハンバーガーとゆでたての季節のトウモロコシのダイナミックなカナディアンランチでした。次男はこの二日間の12人分の食事を楽しそうにこなしていました。綿密な準備をしていたのだと思います。ドリトル先生には夢のような最高の80歳の誕生祝いでした。ドリトル先生の心は幸せいっぱいだったのではないでしょうか。 やがて帰途に。次男は、

「パパ、今度はきちんと帰ってね。高速まっすぐなんだから。」

まっすぐ帰るわけがありません。何故だか、途中で違う道に入ってしまうドリトル先生。高速の出口も全然違う出口。家にたどり着くには往路の倍の時間がかかったのでした。